

文化的相対主義から生命相対主義への不可避的変遷 ～ ヒトに自然論理を実装するための最澄・道元・荒川修作の工夫 ～

得丸公明(衛星システム・エンジニア)

〒158-0081 東京都世田谷区深沢 2-6-15 E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

あらまし ヒトとヒト以外の動物は、ことばを離散的に発するかどうかが違うだけで、感情、感覚、判断、記憶などを持つ点は等しい。最近の遺伝子研究やパブロフの行なった条件反射実験、文明を逃れての砂漠の生活などがそれを明らかにする。そのことに気づき、人間だけが偉いとするヒトの思い込みを正すには、意識の論理回路に自然論理を実装する必要がある。最澄や道元の仏道修行あるいは荒川修作の天命反転が有用ではないだろうか。

キーワード デジタル言語学, 遺伝子の通信システム, セントラルドグマ, 自然論理, パブロフの条件反射実験, 荒川修作, 天命反転, 真社会性動物

An inevitable transition from "Cultural Relativism" to "Biological Relativism" -What Saicho, Dogen and ARAKAWA invented to install the Natural Logic onto Human -

Kimiaki Tokumaru (System Engineer)

2-6-15 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, 158-0081 Japan E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

Abstract The difference between human and non-human animals is just the ability of discrete pronunciation. All the other elements such as emotion, senses, judgment, and memories are common features. Recent genetic researches, Pavlov's experiments and living experience in the desert distant from civilization reveal this fact. In order to and overcome the fallacy of human superiority to the other animals, it is necessary to install the Natural Logic onto our logical circuit consciousness. Japanese Buddhism practices developed by Saicho and Dogen and the Reversible Destiny of ARAKAWA should be useful.

Keyword Digital Linguistics, Genetic Communication System, Central Dogma, Natural Logic, Pavlov's Conditional Reflexes Experiments, ARAKAWA, Reversible Destiny, Eusocial Animal

1. まえがき：

筆者は地球環境問題がなぜ発生したのかについて探求しているうちに、現生人類と言語の起源にたどりついた。そしてヒトとヒト以外の動物の違いは、通信手段がデジタル方式かアナログ方式かの違いであって、他は何も変わらないことに気づいた。[1][2][3][4][5]

やや大雑把ないい方になるが、ヒトとヒト以外の動物の違いは、地上波デジタル放送を受信するデジタルテレビ受像機とアナログ放送を受信するアナログ受像機の違いに似ている。デジタル方式のほうがたくさんの情報を送れて音声や映像は美しいが、一方で情報源・通信路・伝送路の符号化を行なうための高速データ処理装置と大容量記憶装置が必要となるほか、符号化にともなう遅延が起きるためデジタル放送は同時性を失い、時報機能がなくなった。ヒトはデジタルな言語の符号化論理にバグがあるから、自然から遠ざかり、自然を破壊しつつしているのだろうか。

ヒトのデジタル言語は、音節と単語による二重の結合(分節化)がベースとなっている。第一次結合は数音節で単語を構成し、単語それぞれが記憶や文法規則と結びつく。記憶とパターン認識によって結びついた単

語が概念であり、概念を結合・修飾する法則を体現する単語が文法である。文法によって単語を構文することが第二次結合である。語彙数の多さと複雑な意味づけは、ヒトの脳が拡大したために可能となった。

こうして作られた文をヒトは固有の発声器官によって離散的に発声する。そして聴覚は、アナログな音声振幅の包絡線として認識しシンボル(単語)単位で処理する。聴覚の言語処理はヒトも愛玩動物も同じ神経メカニズム、聞き取った聴覚刺激を音響パターン認識によって記憶と結びつけるという点で同じである。これは単細胞生物ももつ、生命の本能の発現であろう。

言語はヒトの発明ではなく、DNA/RNAの4種類の核酸、コドン、アミノ酸、ペプチド結合、タンパク質へと続く生命の4元デジタル通信システムを真似たものだ。人類の過ちは、自分たちが自然の一部であることを忘れて、自然を敵対視した文明空間を構築したところにある。平面と直線でできた文明の中で生まれ育つことによって、ヒトの認識装置はますます自然から乖離し、自然の多様性を敵対視するようになり、自らの運命をも袋小路に追い込んでしまった。

以下、2ではヒトが自然の一部であることを示し、3

では文明の中で自然論理を意識の上に実装するために、最澄、道元、荒川修作が体系化した工夫を概観したい。

2. 本能も知能も同じ生命論理に基づいている

2.1. 分節言語は知能か本能か

レヴィ=ストロースは、『アメーバの譬え話』の中で、哺乳類の細胞間コミュニケーションを担っている化学物質環状アデノシン一リン酸 AMPc が、単細胞生物アメーバが食物不足のときに、集団化して湿気や熱刺激を求めて移動する能力を発揮するための有機的結合を促す物質であることを指摘している。[6]

レヴィ=ストロースは、この譬え話によって、社会生活を営むということは自らを犠牲にして集団を生かすための暴力装置であるということ、つまり人間の食人の歴史は種として生きのびるために生み出した知恵であることを示唆する。人間の社会性とアメーバの社会性は、同じ分子メカニズムによる、同じ知恵の発現であるというのだ。

我々が知能と呼んでいるものと、アメーバの本能は、なんら変わらない。レヴィ=ストロースは、文化相対主義の立場で民族文化の平等を唱えたが、晩年は遺伝子研究の成果を受容して、人類と他の生物が生命として平等であるという考えに至ったようである。

創世記の「はじめに言葉ありき」は、遺伝子の言葉を指しているという可能性はないだろうか。

遺伝子コードの構造と操作についての研究の方が、いくつかの単語あるいは文の断片をボノボに教え込むために注がれる労力以上に、分節言語の性質について多くのことを明らかにしてくれるし、また逆もしかりである。というのは、ヴィーコの螺旋に似せて、同一の機能が、遺伝子と分節言語という生命体の異なった段階に回帰的に現れるからである。その獲得あるいはその学習の段階を遡っても分節言語の起源を発見することはできないだろう。分節言語のモデルとなる、予めそれを構成している別の言語がある。[6]

遺伝子と分節言語は似ている。「DNA⇒RNA⇒タンパク質」というセントラルドグマの一方方向的な流れと、ヒトの「記憶⇒音節符号(語)⇒意味」の流れは同型である。RNA が形成した 3 つの核酸からなるコドンがアミノ酸に置き換えられることと、離散的に発声された単語を聴覚器官がアナログなシンボルとして受け止めて脳内処理することが、デジタル送信/アナログ受信によるエントロピ的安定をもたらすことも同じである。アミノ酸列や単語の情報を意味へと置き換えるプロセスでは、生命論理が作用していると思われる。

2.2. 分節言語の本能性

分節言語とは何を指すのか。「はっきり発音する」、

「世界を分類する」という意味だけではなさそうだ。この言葉がそもそものような文脈で使われてきたのかを概観することにする。

私が浅薄な探求の中で見つけた最古の用例は、ヴィーコである。「人間の共通感覚」から得られる「さまざまな分節言語のすべてに起源をあたえる任務を担った知性の内なる辞書」という表現において、分節言語が何を意味しているのか明らかではない。[7]

フランスの医者であるブイヨーは 1825 年の論文の中で「脳の前葉に言葉、あるいはわれわれの考えを表わす主要な記号の生成と記憶の場所がある。脳の前葉が langage articulé の場所だと結論できないだろうか」と述べた。[8]またブロカは 1861 年に解剖学会で行なった報告の中で langage articulé を論じた。[9]邦訳は「分節言語」ではなく「構音言語」になっていて、「構音言語の特殊機能をめぐって少なくとも 2 つの仮説をたてることができる」、この部位の異常によっておきる障害は「知能障害である高等機能」か「単なる運動障害」であろう。前者である見込みが多いと思うが、はっきりと見解を表明する勇気はないと語っている。

「分節言語」という言葉は漠然と「言語に関する機能」という意味で使われはじめ、それが現代に至るも十分に解明されていないということのようだ。

筆者は、先人が言葉に込めた思いを推し量った上で、我々の言語機能には、言語以前の感情、知能以前の本能があると考える。[4]ヒトはおしゃべりを思考や情報の伝達手段として使うだけでなく、おしゃべり自体を楽しんでいる。声にこそ出さないものの、我々の脳内では四六時中無音の内言が生まれている。我々の脳は感情のおもむくまま休むことなく言葉を紡いでいる。坐禅をするとそれがわかる。坐禅は「止観」といって、心の中の言語活動を止めることを求めるが、それがどれほど難しいかやってみるとわかる。

langage articulé は、構音運動制御や知的構文機能も含むが、その前提として本能的な、感情にしたがって単語を連鎖状に結合して音声化する作用を含むと考えられないだろうか。遺伝子の通信システムに照らして考えると、単語を結合する分節言語の機能は、アミノ酸をポリペプチドに紡いでいくリボソームの役割に似てはいないか。

2.3. パブロフの条件反射実験の「前方誤り訂正」

ヒトの言語活動が自然であり、ヒト以外の動物たちとの違いは用いられている信号がデジタルかアナログかの違いに過ぎないことは、パブロフの行なった「条件反射」実験からも読み取れる。

パブロフが犬を使った条件反射の実験を行なったことは広く知られている。しかしながら、パブロフが 30

年かけて、多いときには100人ほどの研究者を指揮して、この実験を続けたことや、パブロフがなぜこの実験を行なったのか、得られた結論は何だったかということは、あまり知られていない。

実験は、まず視覚や聴覚に訴える**条件反射刺激**を与え、次に餌や酸といった物質を**無条件刺激**として犬の口腔内に入れることによって、条件刺激に対して**効果**として涎が出るように条件づけを行なうところから始まる。世間一般で論じられる「条件反射」は、この条件づけの部分である。しかしこれは実験の前提あるいは準備段階にすぎない。実験はその先に始まるのだ。

単語がその単語と結びついた個々人の記憶の集合と結びつく現象は、単語と記憶のパターン認識であり、条件反射実験が参考になると考えて、筆者はパブロフの著作を読んだ。[10]文庫本で上下二冊、500頁に足らない分量だが、読み解くのに骨が折れた。パブロフは実験のやり方を明確に説明しているのだが、実験結果とその解釈がなかなか頭に入ってこなかったからだ。

条件づけをした犬に、条件刺激を与えるけれども、無条件刺激を与えないと、わずかに数回で効果が出なくなる現象を、パブロフは「内抑制」であるとし、「条件反射の消去」と呼んだ。どうしてこの現象を「抑制」と呼ぶのか、条件刺激が無条件刺激と結びつかない状況は、条件刺激性を「失った」だけの「無化」、「信号性の喪失」とでも呼ぶのが適当ではないかと思った。第14講を読んでわかったのは、パブロフは、これを「大脳皮質細胞が条件刺激の影響によって抑制状態へ移行する」現象として捉えていたということだ。

何度か本を読み直した結果、パブロフは、動物には魂がないとするキリスト教の教えのためか、条件反射実験を始めた背景には、犬に感情、感覚、欲望がないことを証明する目的があったことに気づいた。

パブロフが犬に条件刺激を与えても涎(効果)が生まれない現象を「抑制」と呼んだのは、犬に判断力がないと前提したために、すべての条件刺激は興奮か抑制かの刺激を大脳皮質にもたらすと解釈したからだ。この解釈では説明できない現象がいくつもあったが、その都度パブロフは、大脳皮質の疲労や機能障害として苦しい説明を行なっている。

しかし、苦しい説明すら思いつけない現象があった。それは「負の相互誘導」と名づけられた現象である。筆者は、「負の相互誘導」の理解を試みたことをきっかけに、パブロフが犬の感情・感覚・欲望・記憶を認めていなかったことに気づき、その実験全体を見直すことになった。[4][5]

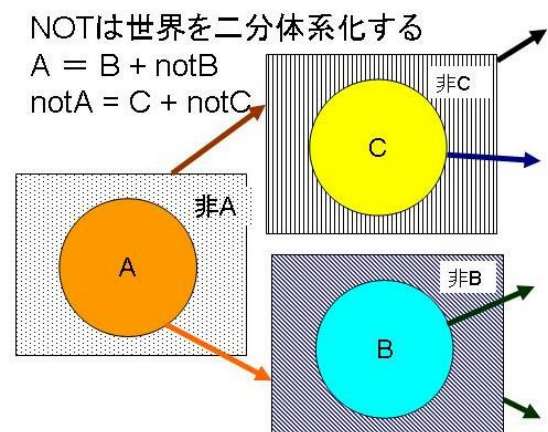
2.4. 犬の概念と概念体系、概念ネットワーク

パブロフの実験結果を、犬にも記憶や判断があると

いう前提で解釈し直すと、驚くべき事実が見えてきた。すなわち犬も概念を持つのみならず、世界を概念体系として内部化するのだ。また、犬の聴覚がヒトと同じ仕組みでヒトの言葉を聞き取っていることや、条件刺激が他の条件刺激と結びつく表現型のネットワーク現象が起きることもパブロフの実験で確認されていた。これらの実験結果は、ヒトとヒト以外の動物の違いが、その意識の内面にあるのではなく、通信のために発する符号のデジタル性だけであることを物語る。

パブロフは本書の結論において、「大脳半球に帰着される高次神経活動のもっとも共通の基盤は、高等動物でも人間でも同一である」と述べているが、その詳細は論じなかった。筆者は以下のように理解する。

- (1) [概念] 犬の意識上では条件刺激と無条件刺激、つまり信号と記憶が結合する。これはヒトが獲得する概念と同一の神経生理現象である。
- (2) [概念体系] 犬は餌が出る条件刺激と出ない刺激を「分化」する。これはブール代数の「NOT」に相当し、 A と $\text{not}A$ に世界を二分化する。二分化できれば、 $\text{世界} = A + \text{not}A = A + B + \text{not}B = A + B + C + \text{not}C$ という具合に二分決定図として体系化できる。



- (3) [聴覚処理メカニズム] パブロフが行なった継時複合刺激の分化実験は、犬が連続するいくつかの音刺激をひとつの刺激として処理することを示した。一方、ヒトの聴覚は音声の離散情報を復元するのではなく、振幅の包絡線情報を取り出して単語単位でシンボル処理することが報告されている。[11]犬もヒトも同じ仕組みで言語を処理しているということになる。
- (4) [表現型のネットワーク] パブロフは、条件づけされていない刺激が、条件づけされた条件刺激に結びつくことを示した。これはヒトにおいて、意味するものが意味するものと結びつく現象と同じである。

2.5. 本能は自然の多様性の中で甦る

動物に魂はないと教える西洋キリスト教社会で教育を受け、日々その中で生き続けている人間が、ヒトと

単細胞動物の共通点、遺伝子のデジタル通信と進化のメカニズム、ヒトとヒト以外の動物のわずかな差が通信に使用する符号のデジタル性にすぎないことを感じ取ることは難しい。

"The Sheltering Desert"は第二次世界大戦中に、ナチス政権に徴用されることを逃れようとした2人の若いドイツ人地質学者が、南西アフリカのナミブ砂漠で二年半にわたってロビンソン・クルーソーのように暮らした記録である。2人は、ナチスが政権をとってファシズムへ戦争へと突き進むドイツを逃れてドイツ領南西アフリカ(現在のナミビア)で仕事をしていたが、第二次世界大戦が始まり、ドイツ軍がマジノ線を破って破竹の勢いで進軍し、南西アフリカにも戦争のプロパガンダと熱狂がおしよせてきたとき、砂漠に隠れることを決意する。食料や銃弾やその他のものを調達し、1匹の犬を連れて、2人は1台の小型トラックに乗って砂漠に隠れ家を探す。そして文明から距離をおいた2年半にわたる砂漠でのサバイバル生活が始まる。

洞窟に居を構えた彼らは、水と食料の確保だけで頭がいっぱいになる。ピストルやライフルという近代兵器を持っているだけでは野生動物を仕留めることはできない。常にギリギリしかない水と食料、厳しくも美しい大自然の中で彼らは徐々に狩猟民の心や勘を取り戻す。そして星空のもとで毎晩語りあうなかで、我々の文明が、進歩というよりはむしろ誤りであったという思いと、生物の進化は偶然的な突然変異で起きるのではなく、環境に適応しようとする生物の意志によって起きるという思いが浮かんできたのだった。

「生命現象のない無生物と比較して、生物の特徴は活動するところにある。単細胞生物であっても、飛んでいくことや外部に対して閉ざすことで、好ましくない環境を避けることができる。しかしそれがそのようにできるようになるためには、感覚、言葉を変えるならば判断能力が必要となる。そうでないと、好ましいか好ましくないか知りえない」

「もしそれぞれの感覚が判断を含んでいるとしたら、人間の判断能力も、実はあらゆる生命体も持っている原初的な本能が発展しただけにすぎないのではないか。

すると、どうして単細胞生物が人類の到達した最高の知的能力への可能性を持たないといえるかね」[12]

「もしかすると我々の文明全体は、人類としての正しい発展から逸脱しているのかもしれない。石器時代の狩猟採集民から受けついだ本能や感覚と根本的に相容れないのかもしれない。どうしてそのように発展したのだろう」[12]

3. 日本で行なわれた自然論理実装の工夫

一神教のユダヤ=キリスト教世界で教育を受けた科学者や哲学者にとって、アメーバとヒトが同じ生命論理で動いていることを理解するのは大変である。パブロフは、眼前に犬の概念や概念体系の存在を感じ取る機会があり、ヒトとイヌで大脳皮質の作用は同じであるという観察結果を得たにもかかわらず、犬に感情や欲望はないとする前提を改めるには至らなかった。

しかし長期間、砂漠の多様な自然の中で暮らした科学者は、ラマルクの適応進化説に近い生命進化のメカニズムや、人類の文明が袋小路の中で滅びつつあることを感じ取った。

日本の思想や宗教は、もともとヒトとヒト以外の生き物の間に違いを認めない。猿と人の違いは「毛が三本」であり、「蠅が手をする足をする」とみる。すべての生命力をたたえるアニミズムの伝統が古代からあり、それが仏教に影響を及ぼし、茶道や武道などの精神性の高い文化を生み出し、万葉集以降現代にいたるまで和歌や俳句を愛し続けた詩作の伝統が共有されている。

日本列島はひとつの聖地である。中緯度に位置し、海岸線と平行な山地が列島を貫いているために夏も冬も降雨に恵まれ、四季折々の自然が美しい。この地に暮らす人間は、古代から進んで山に籠り自らの霊性・神性を高める修行を行なってきた。言葉に頼らず、言語以前の存在を感じ取り自らの内部に写しとることに重きをおいた修行は、生きとし生けるものすべての生命力を平等に称える汎神論に裏打ちされている。

山を歩き、滝に打たれる修験道は現代も続いている。だが、この日本においても、文明社会が自然を破壊し、人々は自然から隔絶した生活を送るようになり、自然と一体化した心を失った。とくに20世紀後半には、土木工事の公共事業が利権と化し、無闇と山を切り開き、生態系に大きな悪影響をもたらした。

聖地日本列島がそこに暮らす人々の意識を自然を反映した形につくりあげていることを自覚していたのは外国で異文化体験をした思想家たちである。最澄(766-823)は中国で1年間の留学、道元(1200-1253)は中国で5年間留学、そして荒川修作(1936-2010)はアメリカに永住して50年間暮らした。彼らが「外国生活」の後に生み出した修行や生活法は、日本的な意識を形成する技法である。天台宗の千日回峰行と曹洞宗の只管打坐は、ともに現代まで続いている修行法だ。

荒川修作は1961年に渡米し、身体・肉体と意識の関係性というテーマに取り組み、「意味のメカニズム」という一連の作品を生み出す。1991年に東京国立近代美術館にて開催された「荒川修作の実験展－見る者がつくられる場」は、荒川の身体そして生命への探求結果を周知させる大きな転機となる。1994年、岡山県奈義

町の奈義町現代美術館に恒久設置作品として「遍在の場・奈義の龍安寺・建築する身体」が完成する。「奈義の龍安寺」は、傾斜したシリンダー状の部屋の中に龍安寺の石庭が両壁に設置されていて、観る者はそこに身を置く。1995年、養老天命反転地が開園、2005年名古屋市に「志段味健康住宅科学公園」、同年秋には「三鷹天命反転住宅 In Memory of Helen Keller」が完成。

荒川の仕事はまだ十分に評価が行なわれていないが、自然の多様な造形を取り込んだ居住空間をつくりだして、そこに住む人間の意識と造形の相互作用を通じて、人間の意識を自然に近づけるものだ。自然の論理を意識に実装する手段という点では、千日回峰や只管打坐と同列に捉えることがもっとも適当であろう。

3.1. 日本仏教の本流である天台宗の荒行

比叡山は古事記にも登場し、奈良時代から修験者たちが集まって修行を行なった霊場であるが、最澄はその麓で生まれ、得度するや比叡山を開いて、中国留学期間を除けば生涯を比叡山で生きた。

日蓮宗、臨済宗、曹洞宗、浄土宗、浄土真宗など鎌倉仏教の宗祖は皆比叡山に学んだ。そして天台宗の教えのうち法華経・止観(禅)・念仏の一つだけを持って分れていった。最澄は日本仏教の祖である。

天台宗には、人間は生まれながらに覚っているとする「本覚」理論がある。これは、山川草木悉皆成仏、山川草木悉有仏性、諸法実相、そして煩惱即菩提、生死即涅槃といった絶対的な現状肯定の思想であり、地球上のすべての生命を時空を超えてひとつとして認識する、大乘仏教の究極といえる。

千日回峰行は第3代天台座主円仁の弟子である相応(831-918)が、奈良時代以来の伝統的な修験道を取り入れて大成した山岳遊巡の法である。行者は7年かけて約4万キロメートルの山道を歩き通す。4万キロというのは赤道一周に等しい。千日回峰を終えた行者には、9日間断食、断水、不眠、不臥で不動真言を唱え続ける「堂入り」という荒行がある。人間の生命力の量的限界と質的限界に挑む究極の荒行は、DNAが記憶する野生の知恵を呼び覚ますためではないか。[13]

3.2. 必要なことだけを正しい方法で行なう只管打坐

睡眠、排泄、入浴といったありとあらゆる人間の行為が、どのように行われなければならないかということについて、道元はこと細かに定め書き残している。道元は、言葉では何も理解できないので、自分の体を僧堂に持ち込んで正しい方法で修行しなければならないと考えていたようだ。[14]

私も永平寺で三泊四日の参禅修行に参加したが、初日の夕飯に始まって四日目の朝食まで8回の食事を応

量器という食器を使っていた。この使い方の作法は極めて複雑であるが、8回繰り返すと間違えずできるようになった。どんなに難しく煩雑なことでも、やる気があればしつけられる、何回も繰り返せば覚えられると気づいてうれしくなった。

道元は坐禅についても、「普勧坐禅儀」という詳細な手引きを用意している。何も考えず、ひたすら静かに坐る。最低限必要なことだけを、正しい方法で行なう。その実践を続けることが覚りである(修証一如)。

3.3. 天命反転: 自然との相互作用で心をつくる

我々の文明が、仮に正しい方向から逸脱しているとしても、文明の中で暮らすかぎり、それに気づくことはない。何か変だなと思ったり、体や心が文明を拒否したとしても、文明の過った発展が原因であるということには気づかない。30年以上、犬を使った実験を行なって「高次神経活動のもっとも共通の基盤は、高等動物でも人間でも同一である」という結論に達しながら、犬には記憶や判断能力がないとする前提を改めることはなかった。

言語学者の鈴木孝夫は「ことばの『意味』は、ことばによって伝達することができない」という。[15]最澄が修験道を重んじ、道元がこと細かに生活全般に及ぶ修行法を規定したもの、ことばでは何も伝わらないことがわかっていたからだ。長い年月かけて構築された概念体系や判断論理の誤りをことばで正すことはできない。実験を行なってそれを観察しても無駄である。

日本という聖地から離れて暮らした荒川は、環境によって意識が形成されることに気づきそのメカニズムを研究しつづけた。そして最終的に天命反転の居住空間に行きついた。荒川は、直線と平面で区切られた現代文明空間に住むかぎり我々の意識は自然と調和しえないという絶望的状况に気づいたために、自然のあるべき道から逸脱してしまった我々の意識を再び自然と調和させる装置として天命反転の空間をつくり、その使用法を書き残した。これは道元に学んだと思われる。

したがって、天命反転とは、自然の造形をもとにしてつくられた空間との相互作用を通じて、失ってしまった子ども心を取り戻すことであり、野生動物のようにまっすぐに生きる心になることである。また、文明の中で植えつけられた、モノを欲しがったり、お金や名誉や地位を望んだり、人間だけ偉いという過った考えを捨てることでもある。自然の中で生まれ、自然との調和を保っていた本来のヒトに戻ることであり、ヒトの意識に自然論理を実装することである。

4. むすび: 父母未生以前本来の面目

ミミズとハエ、スズメとツバメのどちらが偉いかと

いう問いは無意味(ナンセンス)である。同様に、ヒトが他の動物より偉いと考えることも、人権や土地所有権といったヒトだけが権利をもつとする考えも無意味である。ヒトの優越性や人権や土地所有権といった考えが誤りであり、他の動植物の生態系を犠牲としたヒトの人口爆発をもたらし、現代世界が直面する地球環境問題を引き起こしたと考えられる。

階級や人権という抽象概念は自然には存在しない、それは真社会性生活を送るヒトの内部規範であり、人と人を拘束することはあっても、他の動植物に影響を及ぼしてはならないものではないだろうか。

心を無にして、世界を直視せよ。最低限の衣食に満足し、自然生態系になるべく負荷のかからない生活をせよ。天命反転によって意識を自然に回帰させることができれば、人生ははかり知れない発見と喜びに満ち溢れたものとなる。最澄や道元にならって、荒川修作は生涯かけてこれを伝えようとしたのではないか。

謝 辞

三鷹天命反転住宅への短期居住を許していただいた倉富和子さん、株式会社 ABRF に感謝します。

文 献

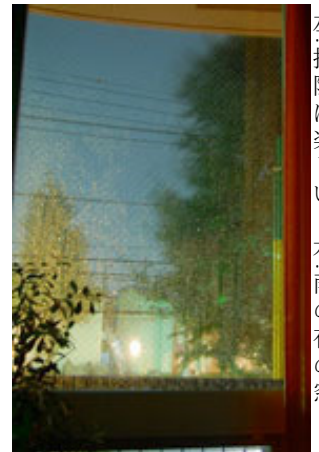
- [1] 得丸公明 クラシーズ河口洞窟 人類が裸になった場所を探して、SOTOKOTO 2007.9
- [2] 得丸公明 洞窟進化仮説 人類が裸になり、言葉を使い始めた洞窟を探して、測量 2007.12
- [3] 得丸公明 ヒトの音声は phonit でデジタル変調されている(復調はアナログ方式である) - デジタル言語学(その1) 情処学会研究会 SLP-81-11
- [4] 得丸公明: 知識の表現型と遺伝子型(デジタル言語学) 「条件反射」と「分節言語」を考える 信学技報 TL2010-10 pp51-56
- [5] 得丸公明 パブロフの条件反射実験の言語学的解析 信学技報 110:42 LOIS2010-8 pp93-98
- [6] レヴィ=ストロース, C. アメーバの譬え話, 出口顕訳, みすず, 2005.7
- [7] 上村忠男 ヴィーコ 学問の起源へ 中公新書 2009
- [8] Bouillaud, J.-B. Traité clinique et physiologique de l'encéphalite, ou inflammation du cerveau, 1825, 矢倉英隆氏による邦訳(私信)
- [9] Broca, P.P. 失語症の1例にもとづく構音言語機能の座に関する考察, 萬年甫・岩田誠編著「プロカ」東大出版会 1992 所収
- [10] パブロフ I.P. 1927 大脳半球の働きについて 条件反射学, 川村浩訳, 岩波文庫 1975
- [11] Phillips, D.P. (2000) Introduction to the Central Auditory Nervous System, in A.F.Jahn and J.R. Santos-Sacchi (Eds), "Physiology of the Ear", 2nd Ed. San Diego, CA: Singular, pp613-638
- [12] Martin, H. The Sheltering Desert, 1957
- [13] 板橋興宗・塩沼亮潤著「大峯千日回峰行 修験道の荒行」春秋社, 2007
- [14] 野々村馨「食う寝る坐る 永平寺修行記」新潮文庫 2001
- [15] 鈴木孝夫 ことばと文化, 1973 岩波新書 p92



三鷹天命反転住宅
筆者による撮影(2007)



球形の書斎の中にいる
と全身で歌いたくなる



左: 掃除は楽しい、右: 雨の夜の窓



デコボコな床の上にその
まま寝ると気持ちいい



なまめかしい夜の庭